

「空（くう）」という自由 - 「般若心経」を読む-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学教養論集刊行会 公開日: 2019-01-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金山, 秋男 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/19860

「^{くう}空」 という自由 ― 「般若心経」を読む

金山 秋 男

本年二月に亡くなった石牟礼道子さんとは、たった一度の出会いだったが、彼女のあの美しい文章からほとんど無限の魂の富をいただいた。まさに「文は人なり」という如く、美しい人であった。いうまでもなく、彼女はほとんど全生涯を「水俣」に捧げた人で、『苦海浄土』以来、彼女は常に被害者とともにあったといつてよい。被害者とともに苦しみ、加害者たるチッソの断罪を超えて、人間の業罪を究めることで、根源的な救いを求めた人である。まさに「苦海」こそが「浄土」でなければ、人の救済は完了することはないだろう。

二〇一三年、『中央公論』一月号の巻頭に載せられた「花の文を」というエッセーも、以上を踏まえながら、数限りない不条理や苦悶のその向うに、魂の浄土を求めた祈りであるといつてよい。

このエッセーは三段組四ページの短いものだが、青年期の弟の自殺から、ほとんど半世紀に亘る「水俣」、そして母のこと、とほば彼女の全生涯を振り返って筆を走らせたものである。本稿では、真の自由とは何かという観点から、「般若心経」の読みのため、彼女のエッセーの核心に寄り添ってみたい。

第一次訴訟派で、水俣語り部の杉本栄子さんは、死の一年ぐらい前、次のように言ったという。

「道子さん、私はもう、許します。チツソも許す。病気になった私たちを迫害した人たちも全部許す。許すと思
うて、祈るごつなりました。毎日が苦しゅうして、祈らずにはおれん……。何は祈るかといえば、人間の罪ばなあ。
自分の罪に対して祈りよつと。人間の罪ちゅうは、自分の罪のことじゃった。

あんまり苦しかもんで、人間の罪ば背負うとるからじゃと思ふようになった。こういう酷か病気が、二度とこの
世に残らんごつ、全部背負い取って、あの世に持って行く。雖でギリギリもみ込むごつ、首のうしろの益の窪の疼
くときが、いちばん辛か。そういうとき、人間の仇ば取るぞとばかり考えよつた。親の仇、人間の仇とばかり、思
いつめよりました。それで疼きも一段ときつかったわけじゃ。

許すという気持ちで祈るようになってから、今日一日ば、なんとか生きられるようになった。

この杉本さんの告白に、石牟礼道子さんは「あの酷い症状を抱えながら、自分の罪に対して祈るとは、なんとも凄絶
な言葉である」と述べているが、私の心を捉えるのは、その「なんとも凄絶な」苦痛の極限で、杉本さんが一種の回心えんしん
ともいふべき、生の大転換を果たしていることである。無論、その回心とは、禪的に言えば、悟りといつてもよいこと
だが、「摩訶般若波羅蜜多心経」（以下「般若心経」と約す）では、観自在菩薩が「般若波羅蜜多」すなわち彼岸に渡る
智慧を深く行じ、自分の一切が「空」であることを「照見」し、一切の苦厄を超えたということに擬えうる事態といっ
てもよいだろう。

言うまでもなく、「般若心経」、否仏教全体の要をなすのは「空」だが、無論それは抽象的な概念ではなく、私たちの
日々の生き方に即したものにほかならない。回わりの一物く、一つひとつの現象、が深く「般若」の眼で観れば、
「空」に満たされているというのだ。それでは、「空」とは何か。

最近、ヴェトナム生まれのティク・ナット・ハンの『般若心経』を読んで、大いに啓発された。無論、これまでに多くの解説書を読んできたが、いずれももう一つ肚にすっきりと納まるものではなかった。だが本書は、初心者向けに書かれたものにもかかわらず、というより、だからこそというべきか、ストレートに身に浸みてくるものがあった。

「空」が「縁起」と表裏一体であることは周知だから、私を含む万物が同時生起・相互存在であることは言うを俟たないが、ハン師のインタービーイング (interbeing 相互存在) という万物の存在根拠を洞察する語を使つての説明には、目からウロコであった。師は次のように言う。

もしあなたが詩人ならば、この一枚の紙に雲が浮んでいるのをはっきりと見るでしょう。雲がなければ、雨はない。雨がなければ、木は育たない。木がなければ、紙は作れない。雲は、紙が存在するためには欠かせないのです。……ゆえに、雲と紙はかわり合つて存在していると言うことができます。

なにか、「風が吹けば桶屋がもうかる」のようなコジつけ表現に見えるが、それとは全く似て非なるものである。なによりも、風―桶が縦 (causal) の人知に基づく因果であるのに対して、雲―紙は宇宙の万物を含み込んだ横の (syn-chronistic 同時存在) 関係性であるからだ。さらに師は、「さらにもっと深く観ていくと、私たち自身もその中にあるのが見え」として、次のようにいう。

…一枚の紙を見ると、その紙は私たちの認知の対象となります。脳科学者たちによって明らかになってきたのは、人の認知が関与しないと、その紙は世界的に世界を明確に語ることはできず、反対に、心の中にだけあるというま

るで主観的な世界を語ることもできないということです。つまり、あらゆるものは—時間、空間、大地、雨、土の中の鉱物、太陽の光、雲、川、熱気、そして意識さえもが、一枚の紙の中に入っているのです。すべてのものがこの一枚の紙と共存しています（相即相入）。存在するということは、相互にかかわり合いながら存在し合うことです。あなただって、一人だけで存在することはできません。他のすべてのものと共に存在しなければならぬのです。この一枚の紙があるのは、その他のすべてのものがあるからです。

つまり、「般若心経」のいう「色」はすべて、他との関係性を断った実体（我）として存在することはできないという。だから、あたかも「俺が俺であるのは、俺のみによってなのだ」という顔をして生きている私たちは迷妄に立脚して生活しているにすぎない。「般若心経」の「是諸法空相」は、すべてがすべてにつながっており、私を含めた一物も他から独立して、我といえるものはない、というのだ。

従って、諸法すなわち天地の万物が空相（関係性において始めて存在する）とすれば、私の誕生や死を超えて、私が存在しうることも道理である。そこに西洋流の存在・非存在の枠組を超えた、仏教ならではの真の存在論が成立しているといっていよう。華嚴思想にいう「一即一切、一切即一」などもその核心を示す一例にほかならない。

ブッダ来世以前に、インドでは不変・不死の魂のような要素があると信じられており、それを「アートマン」（真我）と呼び、死んでも魂はまた別の肉体に存続し、真理（本当の生き方・悟り）を実現するために、輪廻転生を繰り返すと信じられた。最終目標は「ブラフマン」（梵）という絶対至高の「大我」に、己れの小我たるアートマンを結合させること、つまり梵我一如であったことも周知であろう。

しかし、釈尊はその初転法輪から右の考えを否定した。つまり、それは「我」などどこにもないという精神革命で

あり、個人自我も宇宙自我のどちらの概念も、そして、そのような二分法そのものも解体したのである。それが「不生不滅」であり、その「空」の原理をより分かり易く説いたのが、「諸法無我」であり、「諸行無常」にほかならない。

しかも、ここにあるこの紙は、前世では森の木、太陽の光、雲や雨であっただけでなく、今世でもそれらであり続けているのであり、地球の歴史のすべてとの関係において紙である以上、その存在は無始無終、つまりこの宇宙の存在と同じであるといつてよい。同様にこの私も、父母や祖父母、そのまた父母、祖父母…との関係においてのみ、今生きているのであり、またその無限の系譜に関わった師や友のみならず、彼らを取り巻いていた全環境の一つが欠けても、今の私は存在してない、といつてよい。地球生命の歴史が丸ごと溶け込んでいるのが、この私にほかならない。宇宙誕生以来、私たちは大気、太陽光、水、菌類、動植物として存在してきており、それがすべて私の中に残っているというのが、「空」の内容にほかならない。

ところが、この世界を私を中心にして、分別心において、万物を分節して生きざるを得ないというのが人間の業ともいべきものであり、そのことで、この世界の全体性から乖離してしまっているのが私たち人間の現状である。生物としても、私たちには単細胞時代以来の進化の過程で関係したすべてがぎっしり詰まっているといつてよい。その一つでも排除したら、そもそも今の私も存立しえないというのが、この「空」という解脱門の第一をなす縁起性の究極を示す言葉である。

要は、無相の眼で世界を観ること。それによってのみ「照見五蘊皆空度一切苦厄」が実現するということだ。「行深般若波羅蜜多時」に菩薩が「観自在」を得たのも、「空」によって「色」に執着する世界から解放され、真の自由を手にしたからにほかならない。

従って、私が私以外のすべてによって構成されているとするなら、なにかを得ようとして、他と争う必要もないとい

うのが道理である。正に「無智亦無得無所得故」つまり、これがわかった者は、もはや何も得る必要はない。もともとすべては自分の中に備わって存在していたのだから。

このように、三解脱門は第一「空」、第二「無相」とつながって、第三「無願」に到る。その原理は「放下著」。無願とは何かを得ようとしないうこと。無願の行を修得すれば、これの執着、すなわち我執から解放される。執着の種は全部自分の内にあるのだ。無願とは、ものごとの後を追いかけないこと。私たちは、とかく目の前に対象を設定して、絶えずそれを自分のものにしようとあくせくしている。その対象が地位であれ、名譽であれ、財産であれ、官能の快楽であれ、対象を外部に設定し、それを獲得することに執着している限り、心の平安はなく、苦しみや災厄から解放されることはない。

この点、涅槃や悟りを追い求めることも例外ではないのは、そもそも自分自身にも、まわりにあるものにも満足していないからである。私たちはいつも何か価値あるものを得ようとしたり、誰か別の存在になろうとしているが、それは実はすべてははじめから私たちの中にあるものにほかならない。

たとえば、私が今なんらかの罪を犯して刑務所に服役しているか、なにかの難病で何年も入院していると。私の思いはただ一刻も早く出所、退院への希望で埋め尽くされているだろう。そのような現象Ⅱ色によって私の自由は完全に奪取られ、そういう事態を招いた不用心や不始末への後悔と、いつとも知れぬ出所、退院への絶望的な希求に引き裂かれて、私の現在はカラッポとよ。

けれど、刑務所内のバラの花は所外のバラと何の違いもない。病院に届けられた見舞の花束も、院外のバラと何の違いもないだろう。自分を隔絶しているのは、実は世間でもなく、病気でもない。すべて己れの心から発する絶望や後悔の産物にすぎない。共にそのバラをしっかりと見つけて、その香りをマインドフルに味わえばよい。なぜなら一輪のバ

ラの花にも、天地のすべてが、そして時空を絶した人々の思いが込められているのだから。

しかし、世俗の中で「真如諦」から隔絶した生を日々営んでいる私たち（世俗諦）には、なかなか右のように思えない。それを阻んでいるのが、仏教では「所知障」つまり知識による妨げと、「煩惱障」つまり深い欲望による妨げである。

まず所知障、真理を求めるにも、すでに知っていることを手放さなければならぬというのだ。何か欲しいものがあると、えてして私たちは、自分には欠けていて、しかも手をつかみとれる独立した実体だと思ってしまう。何かを追い求めている限り、主体も対象も実体という虚妄に妨げられ、真如諦、すなわち真実に即した在り方から遠ざからざるを得ない。

アダムとイヴというオヤジ、オフクロが知恵の木の実を食べてしまっただけで、人類にとって、知識は片方で文明を築く原理ではありながら、同時に真知すなわち真の智慧から、私たちを隔てる障害となってしまうのだ。真理を求めて進むためには、すでに知っていることを手放さなければならない。今もっている知識に固執すると、視野が閉ざされてしまい、より深い真理を求める、私たちの誰にも内在する般若の知を妨げることになってしまうからだ。私たちの存在も知識も、そこに固執すれば、実体化という虚妄の中で、さらなる苦厄を背負うことになってしまう。「空」の異名は変化であり、進展であり、無常であり、空がなければ、宇宙にも、地球にも、文明にも、私にも変化もなく、成長も進歩も退歩もない凍結した存在になってしまう。

私たちは、どのような概念も、般若の知の基盤として使うことはできない。涅槃や解脱や悟りのような概念も、当然例外ではなく、所詮、真理は知識や概念の蓄積の中ではなく、深く世界の一物／＼にマインドフルな関心を抱きつつ、ただ生きることの中にあるというのである。

さて、自分が真に自分であるためのもうひとつの妨げも、「煩惱障」すなわち、縁起の原理から乖離し、優越感や劣等感に胚胎する悩みと苦しみである、その内容は混乱、憎悪、不安、渴望、復讐心など。それらによって、私たちに無始以来備わっている「空」を観る無相の鏡はくもり、現実のありのままの姿に真相が観えなくなっているのだ。

たとえば、憎しみの感情から解放されれば、即座に涅槃の涼やかな境地が現成するということ。仏道修行の目的は解放と自由の境地を得ることだが、それは自縄自縛として、自分を縛りつけて苦しめている紐や縄の結び目をほいて、自らを解放することにほかならない。

「波羅蜜多」の智慧、すなわち彼岸（自他ともに一切の苦厄から解放された世界）へ渡るための智慧は、従って私たちがその結び目をすべて解き放って、あらゆる苦悩を断ち切る、気づきのチカラを私たちに与えてくれるもの、ということだ。到彼岸とはすべての撃縛を離却して、真の自由の岸辺にたどり着くこと。仏教は、キリスト教やイスラム教のように、神の恩寵によってではなく、すべてに備わった智慧を通して、真の解放や救済が実現されると説くものである。神があるとして、それも私たちの外部に存在するものではないのだから。

このように、「照見五蘊皆空」することが、そのまま一切皆空、すなわち己れと万物が透過的に感応道交している境界である。道元の「身心脱落」も、まさに彼の「空」体験にほかならず、その境界を彼は『正法眼蔵 弁道話』に次のように記している。まさに機法一体が現成した瞬間である。

もし人一時なりといふとも、三業に仏印を標し、三昧に端坐するとき、遍法界みな仏印となり、尽虚空ことごとくさとりとなる。ゆゑに諸仏如来をしては本地の法楽をまし、覚道の莊嚴をあらたにす。および十方法界、三途六道の群類、みなともに一時に身心明浄にして、大解脱地を証し、本来面目現するとき、諸法みな正覚を証會し、万

物ともに仏身心を使用して、すみやかに証会の辺際を一超して、覺樹王に端坐し、一時に無等等の大法輪を転じ、究竟無為の深般若を開演す。これらの等正覺、さらにかへりてしたしくあひ冥資するみちかよふがゆゑに、この坐禪人、確爾として身心脱落し、従来雜穢の知見思量を裁断して、天真の仏法に証会し、…このとき十方法界の土地草木、牆壁瓦礫、みな仏事をなすをもて、そのおこすところの風水の利益にあづかるともがら、みな甚妙不可思議の仏化に冥資せられて、ちかきさとりをあらはす。

と、少々表現が大きさに見えるが、「色」一色の我が世界に閉じ込められていた「坐禪人」に、あたかも霧が一気に晴れるように、尽法界がその真相を現わした瞬間である。

このように、私たちの所知障は脚下にある単純明解な真実を見過して、より遠くに、より複雑なものを求めがちであるが、道元や法然、親鸞が見出したのは、只管打坐による、あるいは白木の念仏による、万物相即相入（インタービーイング）の再発見だったといつてよいだろう。

さて、本稿冒頭の石牟礼さんの「花の文を」に話を戻そう。これまで触れてきた一色即是空、空即是色」の真相を、そのまま杉本栄子さんの一種の回心と同じだといつてもいい。しかし、苦痛の極限における栄子さんの転換、つまり「親の仇、人間の仇」という復讐の怨念から、「何ば祈るかといえは、人間の罪ばなあ。自分の罪に対して祈りよつと。人間の罪ちゅうは、自分の罪のことじゃった」への境位の変換は、加害者・被害者の二元論すら超越するような宗教・哲学的転換といわぬ訳にはいかない。それを彼女は、思弁ではなく、日々の苦痛と絶望の中で探り当てたことが重要なのである。ここでは外部的な加害者・被害者は、彼女の内部でインタービーイングとなって生きている。石牟礼さんはさらに言う。

栄子さんの船が大漁のとき、海辺の生きものたちが狐や狸まで、エンジンの音を聞きつけて渚に寄って来たというが、それらのものたちに、市場に出せない小魚を栄子さんが、「ソーイソーイ、ソーイソーイ」と投げ与えられる。生きものたちは総出して、つまさきだちになり、両手を差し出しながら待っていたというエピソードがある。栄子さんがいらっしやらないと海辺は賑わわない。

と、ここでは人も動物も相互存在としてのインタービーイングを生きているといっている。

水俣は突然に発生した環境破壊ではない。近代以降の人間中心主義の中で、人間の業が効率と利潤の追求の結果、吹き出したものだ。水俣でも人に症状が露見する十年以上も前から、魚は真直ぐに泳げず、岩に突き当たり、間もなく腹を上にして浮き上がり、カラスも妙な飛び方をし、やがて目を開いたまま死んでいるのがあちこちに見られ、「月の浦の猫はキリキリ舞うて狂い死にする」という噂が立っていたという。もし住民が、否私たちがもう少しこれらの生きものたちとインタービーイング（兄弟）として生きていたら、少なくともあれほどまでの人災は防げたはずである。魚やカラスや猫も私たちすべての人間中心主義の被害者ではないのだろうか。

まさに栄子さんのいう「人間の罪ちゅうは、自分の罪のことじゃった」というしかない。真如諦からみれば、チツソも被害者も加害・被害の連鎖という業を背負っているというしかないだろう。栄子さんは極限的な苦しみの果てに、「空」に匹敵する巨きな世界に突き出たといっただろう。

そして、栄子さんのみならず、幾多の人々の悲惨に寄り添ってきた石牟礼さん姿勢。それは上から目線の同情などではない。彼女の数々の文章から私が学んできたのは、「縁」という不思議と、それを見詰める優しさだ。仏教の「空」に匹敵する語を、それ以前に日本人は古神道ともいうべき魂の信仰から受けついできた。やがて「縁」としかいえない

存在のもろもろの関係の不思議は、外来宗教としての理論武装した仏教などより、単純なだけ、より直接で通じ合うものだといってよいと思う。

たとえば、それを石牟礼道子さんは、次のような優しく美しい文章で記している。彼女の『天の魚』という作品の冒頭におかれた文章だ。

生死のあわいにあれば

なつかしくそうろう

みなみなまぼろしのえにしなり

おん身の勤行に殉ずるにあらず　ひとえにわたくしのかなしみに殉ずるにあれば　同行のえにしはまぼろしふかくして一期の闇のなかなりし　ひともわれもいのちの臨終いしまわかくなればかなしきゆえにけむり立つ雪炎の海をゆくごとくなれど　われより深く死なんとする鳥の眸めに遭えり　はたまたその海の割るるときあらわれて　地の低きところを這う虫に逢えるなり

この虫の死にざまに添わんとするとき　ようやくにしてわれもまたにんげんのいちにんなりしや　かかるいのちのごとくなれば　この世とはわが世のみにて　われもおん身も　ひとりきわみの世をあいはてるべく　なつかしきかな

いまひとたび人間に生まるるべしや　生類のみやこはいずくなりや　わが祖おやは草の親　四季の風を司り魚の祭りを祀りたまえとも　生類の邑はすでになく　かりそめならず今生いまの刻ときをゆくに　わが眸めふかき雪なりしかな

これこそ、生きとし生けるものが、お互にインタービーイングとして、共にこの世に存在することの悲しみ（＝愛しみ）を生きていることを深く受けとめた言葉だ。そのような根底においてこそ、杉本栄子さんの回心もあり、それによって、「今日一日ば、なんとか生きられるようになった」のである。

「花の文を」はその末尾で、石牟礼さんの母親に言及し、十歳の時にその母親、つまり道子さんの祖母が発狂したあとの母の生・死を描いて終わる。母の呟きは「…自分の方が、親にならんば…：ち、思いおった」。そしてこの文章は次のように終わっている。

ふるえながらわたしの腕をまさぐり、撫でている。自分のことを、無学文盲の田舎者だと思いこんでいた。母はこの四日後に逝った。……

八十を過ぎてても、うらうらとして、あとけないところのある人だった。畑にゆく人が寝ている母に見舞をおっしゃって下さると、母は「草によろしゅういうて下はりませ」と、畑の草に言づてをいうのだった。

と、道子さんやその母には人間や動物や植物といった分類はすでにない。私たちはもとより、鹿であり、魚であり、花であり、草であり、雲であり、太陽の光であり、同時にそれらも私たちである。私たちの苦しみは鹿や魚や花や雲や陽光の苦しみであり、すべての存在の本性が私たちの本性そのものであるとすれば、私たちには守るべき個（我）などはなく、何ものも恐れるべきものもなく、自由に万物のいのちを生きていくことができるのだ。